



The Star in the West

東京西ワイズメンズクラブ会報

THE SERVICE CLUB FOR THE YMCA

THEY'S MEN'S CLUB OF TOKYO-NISHI(03)3202-0342

c/o TOKYO YMCA YAMATE CENTER,2-18-12 NISHIWASEDA,SHINJUKU-KU,TOKYO 169-0051,JAPAN

- 国際会長主題 「輝かそう、あなたの光を」
- アジア会長主題 「変化をもたらそう」
- 東日本区理事主題 「未来に向けて今すぐ行動しよう」
- あずさ部部長主題 「変わるに挑戦！」
- 東京西クラブ会長主題 「楽しく、元気で、そして仲間を迎えよう！」

2023年2月号

NO 557

「さて、あなたはこの三人の中で、誰が追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか」
 律法の専門家と言った。「その人を助けた人です」そこでイエスは言われた。「行って
 あなたも同じようにしなさい」
 ルカによる福音書10章36-37節

Time of Fast (断食の時) 吉田明弘

国際協会は、今月を Time of Fast (断食の時) としています。クラブ例会の食事代は、通常1,500円で、年会費から支出していますが、2月は、食事を出さず、この分を、国際協会の国際救援活動に献金しています。ただ、健康も配慮して軽い食事と飲み物を用意して、参加者から500円ずついただいています。日本のワイズメンズクラブは、ほとんどこのような方式のようです。

Time of Fast (TOF:断食の時) は、1969年に国際協会から発表された時、入会間もない私にとって衝撃的でした。英語の意味するものは一瞬掴めませんでした。説明を聞いて共感しました。当時のワイズメンズクラブの事業といえば、IBC、BF、YMCA サービス、PWASF (主事養成基金)、YEEP (ワイズ子弟留学制度)、メネットと、意義はあってもほとんどが仲間同士、内向きのものでした。それでもとにかく楽しく意義も感じていましたが、一方では

奉仕クラブとして、このままで良いのかという思いもありました。当然国際本部においても危機感があり、戦前から World Outlook (世界展望) という事業が部門を設けていましたし、私が入会してからも、Human Crisis (人類の危機) といった国際奉仕クラブとしての問題意識をもって難民支援などを訴え、日本区も協力していました。

TOF の食事を一食抜いて、その食事代を捧げようという考えは誰にも分かりやすく、公平な素晴らしいアイデアでした。日本区でも、クラブごとにどのように行なうかが、ワイズメン同士の話題になり、活気が出ました。

でも、現在はどうでしょう。食事を節約して、その分を献金していると言えば、誰もが「素晴らしいね」と言います。でも、「その献金を何に使うの？」と聴かれて即答できる日本のワイズメンが、何人いるのでしょうか。よく判らないのです。

これは、正しく使われていないと言う意味ではありません。昨年、国際に11のTOFのプロジェクトが申請され、審査の結果8プロジェクトに決まったと報告があり、審査方法が説明されていました。きちんとされています。しかしプロジェクトについては、判りにくいのです。これは国際的な奉仕組織の宿命かもしれません。具体的なプロジェクトは、現地主義で実行されますから、他の地域には理解がピンとこないことがあるのでしょうか。

献金は税金同様、いったん払ってしまえば、用途が見えにくくなってしまふのでしょうか。そのままでは、他の大規模の募金、あるいは税金のように感激のないものとなってしまいます。やはり、組織の各段階の役員が、わかりやすく知らせる工夫、努力をすべきだし、いわば納税者の立場の私たちは、それを求めるべきだと思います。そのことによって、基金がいつまでも生き生きとした感動あるものとして継続されるのだと思います。

クラブ役員

- 会長 高嶋美知子
- 副会長 吉田明弘
- 書記 本川悦子
- 会計 篠原文恵
- 担当主事 横山弥利

1月の記録		ニコニコ	4,965円
在籍者数	12人	メネット	1人
(内功労会員)	1人	クラブファンド	0円
出席者数	9人	コメント	1人
出席者数	9人	ファンダ残高	114,715円
ミーティング	1人	ビジター	1人
ミーティング	1人	ホテ校ファンド	10,000円
出席率	90%	ゲスト	0人
出席率	90%	ホテ校残高	43,250円
内Zoom参加	0人	出席者合計	11人
内Zoom参加	0人	WHO参加者	40人

2月TOF例会のご案内

強調テーマ：Time of Fast (断食の時)

Family Fast (家族で断食の時)

Heal the World (世界を癒やそう)

今月の卓話は、近年元気の良い埼玉クラブの会長・浅羽俊一郎さんです。東京 YMCA (江東・山手・千葉出向) で8、9年間、会員活動に従事した後、国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) に勤務。難民に関わる緊急支援キャンプ設営、キャンプ運営、資金調達、東京事務所副代表などを歴任、経験。パキスタンの事務所長も務められました。

日時：2月16日(木)18:30~20:30

会場：ウェルファーム杉並 03-5335-7318

会費：500円 (どなたも)

担当：B班 (吉田、石井、鳥越)

HAPPY BIRTHDAY

8日 高嶋美知子

開会点鐘

ワイズソング 静唱

聖句朗読・祈祷

開会挨拶とゲストご紹介

会食

卓話

「古里知らずのよもやま話」

埼玉クラブ会長 浅羽 俊一郎さん

ハッピーバースデー

ワイズ報告

YMCA 報告

ニコニコ

閉会点鐘

受付 鳥越 成代

司会 吉田 明弘

会長 高嶋美知子

一 同

神谷 幸男

会長 高嶋美知子

一 同

各 担当

横山 弥利

一 同

会長 高嶋美知子

一 同

一 同

一 同

一 同

会長 高嶋美知子

— 1月事務会報告—

日時：1月26日(木)

17:00~18:30

会場：山手センター 3F

出席者：篠原、本川、吉田

<報告事項>

①1月の会計報告を承認した。

②1月7日、在京クラブ新年会後、臨時クラブ役員会を開き、2023-2024年度(次期会長)に本川悦子さんを選んだ。出席者は、河原崎、篠原、本川、村野。

1月のクラブ例会において高嶋会長から報告され、承認された。

<協議事項>

①次年度クラブ3役について、本川次期会長から提案があり、承認した。

会長：本川悦子

副会長：神谷幸男

書記：村野絢子

会計：篠原文恵

②2025-2026年度あずさ部長は輪番で東京西クラブから候補者をだすことになっている。この場合、部三役に付いても候補を出すことになるが、結論が出

なかった。早急に決定することが求められている。部長を推薦する場合は、部書記、部会計の推薦もすることになっている。クラブの現状を踏まえて、クラブ全体のメンバー構成では受諾するには無理との判断もあるが、3人の出席の事務会では結論がでなかった。

いずれにしてもクラブ全体の合意が必要である。仮に辞退した場合は次順のクラブにまわるので、早急な結論が求められる。

③YMCA 機関紙にワイズ情報を掲載しているが、当クラブ情報は吉田さんが起案し、承認された。

④月当番を3班から2班にすることについて提案されたが、結論がでなかった。

<協議事項> 例会関係

①2月：TOF例会とする。卓話は浅羽俊一郎さん(埼玉クラブ会長)。「2月例会案内」通り。

②3月：卓話は荒このみさん(米文学者・『風と共に去りぬーアメリカン・サーガの光と影』の著者)に「米国合衆国にとって

卓話者紹介

浅羽俊一郎(あさば・しゅんいちろう)さん

9年前、当クラブのブリテンインタビューで次のように語られました。

「子どもの頃の海外生活、国内の引っ越し35回、野尻学荘、全寮制の高校生活が、今の私の下地。「居場(いば)縁共同体。なにもしていなくても、居るだけで居心地が良く、元気になる場。そのために会員・参加者が無意識に協力出来るような仕掛けが作れると良いのですが」。

そして今。「組織に頼らず、1人で活動してみたい。神によって用意された浦和の両親の家の住まいを改造して地域活動をして、生まれて初めて『地元』を発見」。

のベトナム戦争」についてお話願う。

③4月以降の例会卓話者を早急に決定する。

(書記・本川悦子)



ホテルに勤務した初日から、ホテルエとして、スーツが着こなせるよう在学中は制服で過ごす。写真左はワインサービスの実習、右は小畑校長の授業風景

専門学校海外からの留学生 — 1月例会報告 —

1月19日(木)、山手センター館長・小畑貴裕さんをお迎えして「外国人留学生にスキルをつける仕事の大切さを」の卓話をお願いしました。小畑さんは2016年4月まで約10年間当クラブの主事であり、ホテル学校留学生への奨学金授与の度に現場の内情については聞き知っていましたが、今回は留学生全般についての傾向を伺いました。

ベトナム、ミャンマー、カンボジア、ネパールなど漢字文化圏ではない国からでも、医療福祉専門学校の生徒は増え続けており、その背景を聞くにつけ、迎える日本の人手不足には欠かすことのできない状況が分かりました。ネックになる学費・滞在費用などを受け入れ施設側が奨学金として貸与し、在学中はアルバイト勤務で住居や食費などが支給されるので学生は安心して勉強できる。卒業後は慣れた施設にそのまま就職も可能、受け入れ側も安定した雇用が望める。卒業後に母国に帰る生徒はいるが、家族を呼び寄せて日本に永住するのも可能とのこと。卒業時に介護福祉士という国家資格が得られるので、時々散見する残念な雇用形態で逃げ出す労働者がいる第1次産業にはない良い傾向と思いました。

また、中国や韓国は自国の大学への入学のハードルが高いので日

本の4年制大学の学士の取得…、これも初めて知りました。今やスーパーやコンビニで外国人店員の姿は珍しくなく、東京では公園で遊ぶ子ども達も国際化しています。欧米で常態化している移民文化がすぐそばに来ていることに気づかされました。

卓話の後、高嶋会長からバースデーを迎えたメンバーにお祝いの花束が渡され定時に例会修了となりました。(篠原文恵)

出席者:<メンバー>石井、神谷、河原崎、篠原、高嶋、本川、村野、横山、吉田、<メネット>神谷、<ビジター>小畑貴裕(東京たんぼぼ)

国際会長の途中交代と それに伴う主題の変更

今月号からブリテン冒頭に記載している国際会長名とその主題が変わりました。これはK・C・サムエル国際会長の自らの辞任によって、次期国際会長のウルリック・ラウリドセンさん(デンマーク)が1月17日付けで国際会長に就任したためです。

辞任理由は、サムエル会長が選挙期間中に、ある候補者に疑惑があると考えて、本来必要な国際議会の承認なしに審査委員会を設置し、審査しようとしたため、国際指名委員会審議によって国際憲法ガイドライン国際412に違反すると決定されたためです。前会長は決定前に辞任しました。

■国際ホテル専門学校は、卒業に向け2年生は3学期の授業が始まりました。選択科目には様々な資格取得対策講座がありますが、国家資格・レストランサービス技能検定に25人、ワインコーディネーターや日本酒の唎酒師の資格に8人が受験予定です。ブライダルコーディネーター技能検定に10人が合格。1年生は全員が1月までホテル実習をし、2月から本格的に就職活動が始まります。各社採用活動は積極的で、既に54社の学内企業説明会が決定し、3月からは採用面接もスタートする見込みです。希望就職が果たせるよう1人ひとりをしっかりサポートしていきます。

■2023年度より品川区北品川(御殿山トラストタワー内)に、「東京YMCAウエルネスガーデン品川御殿山」が新規オープンします。主に幼児から高校生を対象に水泳クラスを開設します。また、プレオープン企画として春休み中に短期水泳講習会を実施する予定です。1月25日から受付を開始する他、開設に向けた諸準備が進められています。

■パートナーシップ関係にあり長年支援を続けているバングラデシュYMCAの活動を視察するため現地を訪問します。2月19日~26日に5人の職員が、エディルプールYMCAとビリシリYMCAのNFPE(働く子どもたちの学校)を見学する他、ユースの交流等を予定しています。

■関東大震災から100年となり、1月22日に全社協・灘尾ホールにて内閣府主催「防災とボランティアのつどい」が開催されました。東京YMCAから秋田正人氏(教育・保育事業部/地域福祉事業部統括)が発表者の1人として登壇し、当時の東京YMCAによる救護活動の様子などを紹介しました。民間団体による貴重なボランティア活動を振り返り、現在と未来の防災を考える機会となりました。

担当主事・横山弥利



(写真左上) 1月、世田谷八幡宮でのミーティング。江戸以来の伝統の奉納相撲が行なわれる土俵前、後ろは観覧席。(左下) 同、豪徳寺が発祥とされる赤い首輪の白い招福猫。(右上) 2月予定、新宿御苑のプラタナス並木



神宮内苑の表情が緩み、 新宿御苑は春の訪れ —WHO 2月歩き—

WHO ウォーキング 2月は、初詣の賑わいが去った明治神宮のあまり知られない豊かな自然の『神宮の杜』を味わいましょう。

森も池も、来るべき春の訪れに備えて力を蓄えています。新宿御苑は、早春の花が咲き揃います。

期 日：2月25日(土曜日)

集合・出発：JR山手線原宿駅西口
(鳥居口)前 10:00

解 散：新宿御苑 サービスセンター前 14:30頃

携行品：名札、マスク、健康保険証、弁当、飲料

参加費：300円、交通費、施設利用代400円は各自負担。初参加の方は、名札代200円。

世田谷は千代田区と同じ 城郭が中心だった町

—WHO1月ウォーキング報告—

WHO 1月例会は、17日に世田谷区の中心部を歩きました。世田谷区には区を代表するJRの駅がありません。中世に吉良家によって築城された世田谷城を中心として発展した町です。それは、千代田城を中心として城下町を形成した千代田区に似ているのかもしれませんが。

今回は、吉良家と江戸時代に領主となった彦根井伊家の時代を歩きました。そして、寒さを避けて、世田谷プラネタリウムで、「冬の星座」を観るという企画でした。集合は新宿から便の良い小田急線豪徳寺駅。南関東以外は大雪の予想にもかかわらず40人が集いました。

かつては「玉電」と呼ばれた2編成の可愛い電車、東急世田谷線で宮の坂へ、ここには源義家が奥州遠征の勝利を感謝した世田谷八幡宮がありました。城山通りを歩き、豪徳寺へ。

豪壮な寺院でした。かつては世田谷城の中にあつた吉良家の祈祷寺が由来で、井伊家の菩提寺になって栄えたようです。幕末の大老、井伊直弼をはじめ彦根藩歴代の藩主の墓所があります。本来主役である世田谷城城趾は、石垣、空堀などが僅かに残るのみ、むしろ城を取り巻く形の烏山川緑道が城の堀として、往時のスケールを伝えていました。

ここで、昼食をとり、松陰神社へまわりましたが時間がおしてため、鳥居をくぐっただけで、再び、玉電・松陰神社前から、上町駅へ。お目当てだった、庄屋敷の見学をやめて、プラネタリウムに急ぎました。

ここに入場出来るかどうか、窓口まで行ってみないと分からないのです。大人の時間は13:30分から。コロナの感染予防のため、定員の半分、団体予約は出来

ません。新年の運試しのつもりでしたが、途中で帰られた方、辞退してくださった方、スタッフが遠慮もあって、なんとか入場できました。リクライニングで見やすく、大満足。寝息を立てた方もおられたようでした。(吉田明弘)

今回のワイズ関係の参加は、吉田(東京西)、中澤正子・藤江喜美子(東京たんぼぼ)、樋口順英(東京グリーン)、関喜一郎(元石巻広域)。

WHO今後の計画

WHOの予定は、次の通りです。新たな情報で変更することもあります。直近のWHOレポートをレポートをご確認ください。

3月予定

大名が愛した城南五山。御殿山、島津山でおしゃれな花見をしましょう。

期 日：3月25日(第4土曜日)

4月予定

習志野・谷津干潟。年間120種の野鳥が確認される野鳥の楽園。バードウォッチングも愉しめます。

期 日：4月22日(第4土曜日)

5月予定

武蔵野ススキ野にひかれた野火止用水は沃野をもたらした。古刹・平林寺訪ねます。

期 日：5月27日(第4土曜日)

☆☆☆インタビュー☆☆☆113☆☆
菅野 健さんに聴く
仙台広瀬川クラブ
* * *



—菅野さんのお生まれは。

「私の両親は福島県二本松の出身で母の祖父は幕末に活動した二本松少年隊の生き残り、二本松市の資料館に遺影なども展示されています。父親は海軍軍人で衛生隊に所属し、終戦後は日赤に転籍して人命救助・献血事業に生涯を捧げました」

—幼少期は、どんな子でしたか。

「いわゆるわんぱく小僧。2つ上の兄は静かな人で、5つ下の妹は勝ち気でした」

—小学校での好きな学科は。

「兄がいたため勉強は楽でした。理科は得意でなく、これは大学まで変わりませんでした」

—中学、高校でのクラブ活動は。

「中学からキリスト教主義の東北学院に進学し、ここでキリスト教と出会い、部活ではバレーボールと巡り合いました。この2つとは一生の付き合いになりました。中高時代にバレーボールの県大会で優勝もしました」

—大学では。

「中高一貫学校で、多くは無試験で大学に進学しますが、クラス担当の勧めで東北大学を受験しました。勧められた学部でなく、最も難関な学部を希望したら見事に不合格、浪人が嫌だったので一般受験で東北学院大学に入学しました。大学でもバレーボール部に属しましたが、部の運営に反発して競技が嫌になり、1年で体育系クラブの連合会に出向しました。それが将来を決めることになりました」

—大学紛争は。

「大学3年の頃から大学紛争が激しくなりましたが、まだ授業は正常に行われていました」

—大学のスタッフには公募で。

「大学から職員として勤務しかたの話があり、就職しました。公募ではなく大学のいわゆる一本釣りの感じでした」

—学校の事務部門の仕事は多岐にわたるのでは。

「入職した当時は大学紛争の真っ只中で、若い職員は学校に寝泊まりして警備員のような仕事の毎日でした。大学の古い経営体制が紛争の原因にもなっていたので紛争が落ち着くとさまざまな改革が求められ、主に経理管財部門で研修を受けました。管財部門にいたことが民間会社の方々と交流があり幅が広がったようです」

—YMCA とは。

「中高バレーボール部のOB 会長で仙台クラブにおられた星曠夫さんに誘われて、1994 年になんとなく入会し、ほどなくYMCA の会員にもなりました」

—仙台YMCA は明治38年に創立され、大正時代には県内でバスケットボールやバレーボールの普及に務めたそうですね。

「その話は、YMCA 会員になって初めて知り、驚きました」

—東日本大震災の時は。

「大学を1年前に定年退職していました。3月11日は父母が遺した家にいました。尋常でない揺れにここで死ぬのかと思いました。この日は仙台YMCA ホテル専門学校の卒業祝賀会が仙台駅前のホテルで開会中でした。帰宅できなくなった学生数十人をYMCA に避難させました」

—新クラブ、仙台広瀬川クラブの設立総会の10日前でしょう。菅野さんはチャーターメンバーとして移籍が決まっていた。

「設立準備委員会も仮例会も会を重ねて、5月15日のチャーターナイトの会場も予約していま

した。クラブづくりは延期しよう言う強い意見が出ました。今考えても当然です。しかし、こういう時だからこそ、踏み出そうという方向で意見が一致しました。設立総会には、チャーターメンバー候補6人、在仙と東京からのワイズ・YMCA 関係者、計22人が出席しました。参加者のほとんどが行動服のまま、絶えず余震の恐怖がありました。ここで認証状伝達式も予定通り、5月15日に開催されることが決議されました。当日は、チャーターメンバー全員が顔を揃え、全国から104人の出席を迎え、藤井寛敏国際会長から認証状をいただきました。早速先輩クラブ、仙台、仙台青葉城、後に加わった石巻広域クラブと共に、全国支援を受けて支援活動、ボランティアの拠点として働くことができました」

—菅野さんが仕事以外にやられていることは。

「大学時代からバレー部の監督・部長、指導者を務め、その後は75歳まで連盟会長を務めました。退職後は今年まで民生委員を9年間務めました。現在は仙台YMCA の会長を務めています。YMCA 会長は公益財団の理事長も兼務し、仙台YMCA の経営している4法人の統括が役目です」

—ワイズに期待することは。

『ワイズの信条』にもあるように何よりもYMCA を支えることが肝心だと思っています。政治や企業では不十分なところに手を差し向けたいですね」

—ワイズに入会して一番良かったことは。

「人生で損得なしで働けるところにいられることが嬉しいと感謝しています」

—座右の銘というか、心に留めておられる言葉がありますか。

「聖句『人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言葉で生きるものである』です」

—有難うございました。(吉田明弘)

気分転換は料理②

鮭はおいしいけど怖い

村野絢子

鮭と言えば、子どもの頃は塩焼きかバター焼と決まっていた。オイル焼きもあったかな？ お刺身は出なかった。伯母が毎年贈ってくれるサーモンマリネが届くようになったのはいつ頃からだろう。それは家族全員が大好きでこんなに美味しいものがあったのかと思わせた。時が過ぎ、長女と夏の終わり北海道を旅して宿で出た鮭のチャンチャン焼きの味も忘れられない。キャベツや玉ねぎと共に鮭が味付けされた味噌味と絡まって熱々フーフーしながら「美味しいね」を繰り返した。

北欧からキングサーモンが輸入されるようになり、刺身で食べ

るようになった。ある年、夏休みが終わり、課題の生徒たちの自由研究がどっさり届いたある日曜日、教会から帰って、冷蔵庫から頂いたサーモンをひと切れ醤油に浸けて食べた。美味しい、さらに5~6切れ食べたと思う。少しして、居間で1人やすんでいると、急にお腹が痛くなり、声も出ない。「誰か来て」と何度も叫ぶも食堂でテレビを見ていた家族には届かない。居間で1人「苦しい、痛い」と肩で息をしていると、玄関にチャイムの音、夫が私を探し倒れこんでいるのを見つけ大騒ぎ、隣の義妹が救急車を呼び、吉祥寺の病院に運び込まれた。吐いて楽になった。寄生虫のアニキサスの仕業であった。1週間と言われたが学期初めにそうはいかないとベッドの上で宿題を見る私を見て3日で退院となった。理科

教師の体験授業？ となってしまう。

わが家の定番料理にサーモンマリネがある。ノルウェーのサーモンマリネの冷凍500g、玉ねぎ2個のスライス、大1個のレモンもスライスし、玉ねぎ、サーモン、レモンを順に瓶や器に広げながら重ね詰めていき、たっぷりのかんたん酢（自分でつくるときは、オリーブオイル、酢を主に、塩、砂糖、ベーリーフ、コショウ粒を混ぜる）に浸す。これだけで美味しく出来上がる。翌日から冷蔵庫で2週間は大丈夫。

昔北欧の旅でノルウェーに行ったが、どの宿でもサーモン料理が出てこず、船のランチで初めてサーモンソテーが出て喜んだことを思い出す。

継続は力ない

河原崎和美

我が母校には卒業生の親睦を図るための同好会がある。テニス同好会、俳句同好会など数々の同好会があるが、我々社交ダンス好きが集まって25年ほど前にダンス同好会を作ろうという話になった。しかし、当時社交ダンスのイメージがあまり良くなく同好会事務局側にすぐに認めてもらうことができなかった。

1年間の準備期間を課せられ、毎月会場や人数、どのような活動を行っているか、会計などを詳しく報告させられてやっと認めてもらうことができた。和やかで元氣あふれるこの会はこの度のパンデミックになるまで毎年ダンスパーティーをし、100人もの参加者が集うほどの会にまで発展した。

あるパーティの際には、急に前日に欠員がでて、急ぎ先輩でクラブで一緒にの神谷幸男さんをお誘いしたら二つ返事で参加していただいたのがとても嬉しく感

動したのを覚えている。

2020年に新型コロナウイルスが流行し始め、当たり前のようにダンスをすることができなくなった。特に社交ダンスはペアで組むため、緊急事態宣言やまん延防止等重点措置が明けてからも参加者もナーバスになっていることもあり、とてとても会を再開することはできなかった。私を含め、ダンス同好会の世話人が集まり、今後の会をどのようにしていくのか話すも、自然と「解散する」方向にいつてしまうこともしばしばあった。

昨年暮れに、思い切って一度会を開いてみようということになり、今まで参加してくれていたメンバー1人ひとりに声をかけてみた。皆、高齢ということもあり、特に男性の参加者は1人もおらず、仕方ないので男性のアテンダント（プロの踊りて）を雇い、全盛期に比べると少ないながらも何とか無事に開催することができた。

今まで25年間続けてきた底力のようなものが発揮されたよう

に思う。結果、どのような形でも（小規模でも）動ける人がいる間は続けていきたいと皆同じ思いだったようだ。やはり継続は力なり。25年は無駄ではなかったということだ。

編集後記

2月号の原稿、写真が揃ったのが2月8日。これから製版、印刷、発信となります。神戸の東西交流会は、3日前に終わっていました。当然、その記事は、来月号に載せる予定です。

しかし、すでにネット上には交流会報告は出だしています。1か月後にブリテンでは、記録としての意味があるとしても、ニュースとして鮮度、価値があるのか、どうかを考えてしまいます。

読み物風にするか、解説的にまとめるか。これからは、早さでは新しい媒体に敵いません。近年一般紙の夕刊が、これが新聞かと思うほど変わっています。同じ悩みです。「どうする家康」。

(AY)

